

チューリッヒ日本人学校における現地校との合同体育の指導と実践

前チューリッヒ日本人学校 教諭

京都府京都市立竹田小学校 教諭 川 上 哲 也

キーワード：在外教育施設，国際交流，保健体育，柔道，武道，少人数

1. はじめに

私は2010年より3年間、スイスのチューリッヒ日本人学校で勤めさせていただいた。チューリッヒ日本人学校は当時、全校児童生徒十数名の世界の日本人学校の中でも児童生徒数の減少に悩みを持つ学校であった。しかし、児童生徒は学習や学校行事に対し、児童生徒会を中心に主体となって動き、人数の少なさを感じさせない大きなエネルギーを持っていたことにとっても驚かされた。どの児童生徒も年齢に関係なく仲良く遊び、高学年は低学年の面倒をみることができる、温かさで包まれた学校であるといえる。低学年から中学部・教職員と一緒に校庭でサッカーをしている光景は「児童生徒が安心して生活していることがわかる」と文部科学省視察官の感想をいただいたほどである。

2. チューリッヒ日本人学校と現地校の軌跡

(1) 従来交流

チューリッヒ日本人学校は現地校との交流を学級ごと（複式学級）に実施している。小学部では低学年・中学年・高学年の3つの学級が分かれて現地校との交流を年に2回、中学部も小学部とは異なる現地の中学校で2回交流をしていた。

小学部と中学部では、交流時に児童生徒の使いたい言葉をドイツ語に翻訳し、スイス人のドイツ語指導者に発話の練習をしてもらい、本番に挑むという形をとっていた。

スイスに来て数ヶ月しかたっていない児童や、ドイツ語を挨拶程度しかできない児童にとって、異国の地での交流は、自分のドイツ語が伝わるか、不安が大きかったようである。しかし、日本アニメのクイズや、日本で行う運動会、書道などを教えると、現地児童も大喜びで大変盛り上がった。日本から9000 kmも離れている日本の文化はとても新鮮だったようである。



漢字で名前を書いてプレゼント

(2) 保健体育科での教育課題

本校で人数の減少と共に懸念されるのは学習環境である。特に中学部の保健体育科では、体を動かすことが大好きな2名の生徒しかいないため、バスケットボール、バレーボール、サッカーなどの団体競技で十分な活動がとれない。

下記に示す表は本校の保健体育科の計画である。

平成23年度チューリッヒ日本人学校中学部保健体育 年間計画（一部省略）				
1学期	体力テスト	陸上競技（短距離・ハードル）	水泳	保健
2学期	陸上競技（長距離走・マラソン大会）	バスケットボール・サッカー・バレーボール	創作ダンス リズムダンス	保健
3学期	器械体操（マット運動・跳び箱運動）	柔道	体づくりの運動	保健

このなかで、1学期は、運動会の練習や水泳、陸上競技など個人競技がしめ、少人数でも活動は可能であり、私も一緒に生徒と同じ活動に取り組むことによって、互いに学び合う雰囲気を作り出すことを大切にしている。特に十分な体を動かす活動を保障してやりたいことを体育では大切にしていた。

(3) 課題の克服に向けて

2学期の球技の運動に関しては、十分な運動量、チームプレーの活動を保障させたいと思い、藤田学校長と相談の上、本校の向かいにある、Shulehaus Freiestrasse（フライエストラッセ）校と連絡を取った。フライエストラッセ校のLeibacher（ライバッハ）学校長や担当のChristin（クリスティン）教諭は快くこちらの要望に応じてくれた。

本校が要望した内容は

- ・本校はフライエストラッセ校中学部1年クラスと団体競技（バスケットボール等）で交流を望んでいる。
- フライエストラッセ校の要望として、
- ・日本の中学校で実施している武道、柔道のデモンストレーションを見せて欲しい。

そこで、2学期はフライエストラッセ校の体育に参加することが可能になった。9月～12月の交流では本校生徒・教職員がフライエストラッセ校に出向き、授業に参加させてもらい、1～2月は本校がフライエストラッセ校を招待しての柔道の授業をすることで話がまとまった。互いに秋休み、冬休み、本校は学習発表会を迎えるために、交流日の調整を後日メールにてしなければいけなかった。教務部と話し合い、各交流日の時間割の変更を伝えた。フライエストラッセ校は本校よりも1時間早く（7:30より）授業が始まり、体育は2時間目からであった。本校も時間を調整し、1時間目から体育の交流を実施することが可能になった。今回、現地の教育事情も知ることができ、現地理解教育にもつながった。

(4) フライエストラッセ校での交流

9月当初、マラソン大会が終わり、翌週より団体競技が始まる。生徒は緊張しながらもフライエストラッセ校の新設体育館に入った。同じ中学生同士、最初は挨拶も固かったが、クリスティン教諭の配慮もあり、日本人同士が固まらないように、チームを組んでくれたり、ドイツ語を英語に変えてくれたりして、生徒たちも取り組む内容にとまどうことなく参加できた。

最初の交流はバレーボールの授業であった。それぞれ、2人、3人などのグループに分かれ、サーブ、レシーブの練習、試合形式の練習を行った。私も当然生徒の中に入り、コミュニケーションをはかった。体を動かし出すと、言葉の壁はあるが、良いプレーには拍手をしたり、「nice!」「Good!」など、簡単な英語やドイツ語表現をしてもらい、雰囲気も明るくなっていくことがわかった。生徒たちも、交流前から目標を持って取り組もうとしている様子が分かり、「学習してきたドイツ語や英語を必ず使う」「日本人で固まらないで自分から積極的に動く」など、担任の桂川教諭と話し合い、実りある交流にしようとする意欲が伝わってきた。

2回目からの交流以降、生徒はあったら握手を自然に交わし、互いに距離が縮まったものと思われる。ただ、回数を重ねることに、目に付いてきたのが、授業を受ける姿勢が日本の当然だと思われる姿勢とは異なっていることだ。教師の指示をしているときに、寝転がったり、脚をだらしなく伸ばしたりしている。このような態度に本校の生徒は少し疑問に思い始めていた。

競技では自己中心的なプレーが多く、パスを出し協力する楽しさよりも、自分が楽しむプレーが目立っている。日本人からすると、「なぜパスを出さないの」と思われるプレーの連続だからだ。

体育の学習ではどの学習も、教師が指示を出し、その競技に関係する練習を行い、試合をするといった流れであり、生徒同士が教え合ったり、振り返りを行う時間は設けられていなかった。現地では子どもが汗をかいて楽しみフレッシュすることに重きをおいているとのこと。ここでも日本と異なる教育方法を感じることができた。

(5) 柔道授業の実践

フライエストラッセ校との交流で、5回体育に参加させてもらった。2月に入ると本校が招待する形で柔道の授業を実践した。まず、実践する前に場所の確保である。柔道は畳を必要とするが、本校には畳もない。その中でどのようにして柔道を見せ、また体験させることができるかを考えた。そこで、本校に建物を提供している Kathrin・Otto（カテリン・オットー）氏に相談した。彼女は元スイスの柔道チャンピオンであり、日本に柔道留学の経験のある親日家である。私も日本では柔道の競技・指導経験があったため、カテリン氏の所有する道場で一緒に子どもたちに柔道の指導をさせてもらう機会をいただいていた。カテリン氏は道場を快く提供してくれただけでなく、喜んでデモンストレーションの相手役を引き受けてくれた。もちろん経費は無料である。

フライエストラッセ校との合同体育は1時間目に行った。カテリン氏の道場までは本校から徒歩5分ほどである。引率には私と学校長が行った。道場につくとカテリン氏が待っており、生徒たちもトレーニングウェアに着替え道場の中へ。2試合場以上ある道場に生徒たちは興奮していた様子であった。スイスには畳の文化がなく、新鮮に映ったのではないかと思う。

生徒の中には、柔道着を着ている者も4人ほどおり、道場の生徒であることが分かった。

全員が集まるとカテリン氏に道場を提供してくれたことに対する感謝の気持ちを述べた。そして、柔道は今から100年以上前に作られたスポーツであること。嘉納治五郎という人物が作ったことを道場に飾られている写真を指し説明した。

さっそく、簡単なウォーミングアップを行い、馬跳びや、首のストレッチなど、柔道の中でも怪我のしやすい部分を念入りに動かした。カテリン氏と私とでデモンストレーションを行った。①背負い投げ ②大外刈り ③体落とし ④巴投げなど、柔道の中でも人気のある技を見せた。それぞれ、拍手をしてもらい、私も上機嫌である。

次に寝技の説明である。袈裟固めという技の見本を示し、生徒たちに実践させた。押さえ込まれている相手は逃げるよう指示し、生徒は互いに必死になりながら攻防を繰り返していた。少し、日本的な雰囲気を作るために、「礼」の仕方を教えて、互いに相手に向かって「礼」をさせた。柔道は「礼」に始まり、「礼」に終わる相手を敬うスポーツだからだ。

さらに、柔道の雰囲気をつかんでもらうために、膝をついてからの乱取りも行わせた。柔道とは少し違うが、膝以外の部分が畳に付いたら負けであることを説明し、「礼」を大切にしながら、相手と組み合い、相撲のように相手を投げたり、倒したりして生徒は大興奮であった。本校の生徒はというと、私の柔道着を着て取り組み、黒帯をし、他の生徒と乱取りをしていた。他の生徒からは黒帯「ブラックベルト！」と注目を集め、本人は「ちがう。借りているだけだ」と言いたいのだが、ドイツ語がわからないのでうまく説明できずにたくさんの生徒を相手にしていたようだ。表情は苦しそうだが楽しそう。クリスティン教諭も生徒と楽しみながら柔道に親しみ、授業を喜んでくれた。皆、和やかな雰囲気でも日本の柔道を楽しめて良かったと思う。



【袈裟固めの練習↑ 全体写真↓】



(6) おわりに

このような授業のために道場を提供し、サポートを喜んで引き受けてくれたカテリン氏や、交流を積極的に進めてくれた藤田学校長、交流に理解を示してくれた教職員の方々に心から感謝したい。その後も交流は継続し、挨拶も日常的に交わす関係になった。今でもフライエストラッセ校との交流は本校の国際理解教育の大きな柱となっている。